学校教育学研究，2002，第14巻，pp.87-93

言語学から見た教室の英文法　その5

―― コピュラ文をめぐって ――

有　働　眞理子　　戸　出　朋　子
（兵庫教育大学）（大阪市立大正東中学校）

英語のコピュラ文は，学校において英語学習の最も初期に学ぶべき表現の型となっている。基本的な内容として，初級程度の学習者が次の段階へ進む足がかりになるはずの項目であるが，実際には，このコピュラ文の意味と形についての理解がうまく達成されているとは言い難い状況がある。この小論においては，コピュラ文の取り扱いの実態について，中学校1年レヴェルの教科書を語学的視点から観察し，そこから浮かび上がる諸問題について考察する。特にコピュラ文の意味的・統語的特徴についての説明の指針がないことを大きな問題点として挙げ，よりきめこまかな学習内容の整備のために，語学的検証が必要であることを主張する。

キーワード：コピュラ文，措定文，指定文，連結詞，名詞句

有働眞理子：兵庫教育大学・言語系教育講座・助教授，〒673-1494　兵庫県加東郡社町下久米942-1
E-mail：mariudo@soc.hyogo-u.ac.jp
戸出　朋子：大阪市立大正東中学校・教諭，〒534-0013　大阪市都島区内代町2 - 6 - 15 - 1005
E-mail：todex@attglobal.net

Classroom English Through a Linguistic Perspective (5): With a Focus on Copular Sentences

Mariko Udo and Tomoko Tode
(Hyogo University of Teacher Education) *(Taisho-higashi Junior High School)*

Copular sentences are most frequently the first sentence patterns to learn in English classes in Japan. The meaning and form of sentences of this type, however, hardly seem to be understood properly by the students according to some recent survey. In order to know more about this situation we try to observe the textbook treatment of copular sentences at junior high school level, where we find that school English does not seem to give adequate consideration on the syntax and semantics of copular sentences, which could be one of the reasons why they are not as properly learnt as we would expect.

Key Words: copular sentence, predicational sentence, specificational sentence, copula, NP

Mariko Udo is an Associate Professor Lecturer of Linguistics at the Department of Languages, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Yashiro, Kato-gun, Hyogo 673-1494 Japan. E-mail: mariudo@soc.hyogo-u.ac.jp
Tomoko Tode is a junior high school teacher at Taisho-higashi Junior High School, Osaka-city. 〒534-0013 2-6-25-1005, Uchishiro-cho, Miyakojima-ku, Osaka-city. E-mail: todex@.attglobal.net

0．はじめに

日本の学校英語学習の初期段階，即ち中学校1年レヴェルにおいて，最も基本的な知識として導入される文パタンは，叙述表現のひとつであるコピュラ文と呼ばれるものである。

コピュラとは連結詞或いは繋辞と呼ばれる動詞範疇を指す。英語では*be*，日本語では「ダ」，「デアル」等に相当する語彙群がそれにあてはまる。コピュラ文は，典型的には主語名詞句と補部名詞句が連結詞*be*で繋がれて，「～ハ（ガ）～デアル」といった意味機能を持つ‘NP be NP’の形式で表現された文のことをいう。直観的に最も基本的で単純明快な文型である。英語を学び始めて間もない中学校一年生の子どもたちはこの表現から英語の世界に導かれることになる。

しかしながら，コピュラ文を英語学習の導入とすることについて，或いは導入の内容と方法について，Tode (1999)では，英語を学習し始めて2年経つ日本人中学生の6割が，*be*についての規則を正しく学習できていないという憂慮すべき実態を，実験を通して明らかにした。

この論文では，初期段階において既に理解のつまづきが生じやすいという戸出の指摘した実態を重く見て，教わる側の理解の不調に，教える側の知識提示の不備が関わっていないかどうか，言語学的視点から検証してみたい。

手順として，まずTode（1999）により明らかにされた問題の所在を示す。次にコピュラ文についての語学的なポイントを確認した上で，具体的に中学校1年の教科書に沿って，コピュラ文に関してどのような指導をしたことになるのか，語学的な位置付けを確認しつつ観察していく。同時に，現時点で改善点と思われることについても指摘できる限りコメントする。論考の動機となった問題の指摘及び現場における実態調査は戸出が，実態調査についての語学的検証とまとめは有働が，それぞれ分担して研究を進めた。

1．中学校におけるコピュラ文学習の現状

コピュラ文は、中学校の初期の段階で導入されることから，最も習得の簡単な内容の表現であると一般に認識されているように思われる。ところが中学生の言語運用を調べると，思いの外コピュラ文理解が低迷している様子が観察される。Tode（1999）では中学校2年生111名，3年生107名を被験者として，*be*の現在形と一般動詞現在形の義務的環境をテスト項目とした筆記テストにおける運用実態を調べた。ここでは主に*be*の連結詞としての統語機能が正しく理解されているかどうかについて、①主語（代）名詞句と連結詞*be*がチャンクとして機能すると思われる形（'He is NP'），②コピュラ文一般（'NP is NP'），③一般動詞現在形により*be*の介在する余地のない形（'NP V NP'）の3パタンを区別して、*be*が必要な状況を判断し，その位置を形式的に整えることができるかどうかを見たものである。

全問正答率はほぼ4割にとどまり，残りの6割が上記②または③において誤った認識を示していた。彼らの誤りの内容は，*be*のないコピュラ文（例えば‘*My brother a college student.’のような文）を表出するか，或いは現在形の一般動詞に不必要な*be*を共起させる（例えば‘*He is speak Japanese.’のような文），というのが典型的なものである。上記①に関しては注意が必要で，正答率が*be*を理解しているかどうかを必ずしも反映していない。というのも，特定の主語と連結詞の組み合わせが未分析チャンクとして記憶されることは珍しくなく，外国語習得においては特にそのようなチャンクが重要な役割を果たすことがあり，そのような認知方略的記憶チャンクの形成は*be*に対する理解を前提としないからである。上記の実験は①に対する正答者のみを対象として行われており，②或いは③において犯した誤りは，学習者の*be*についての理解の状況を反映しているといってよいであろう。即ち6割の被験者が，主語と補部を繋ぐ語彙項目として*be*がコピュラ文に不可欠であること，そしてコピュラ動詞が一般動詞とはかなり異なった文法的性質を有することを理解していないということがわかる。理解できないものが半数を超えるという結果は重大である。難易度，重要度ともに導入レヴェルとして適当ではないのか，或いは適当であるがやり方に問題があるのか，そのどちらかである可能性が高い。

この状況に対して現場でとられている対策は決して十分とはいえないようである。上記実験で被験者になった生徒を担当する教師への聞き取り調査によると，指導のポイントは主に形態変化パタンの習熟に置かれ，コピュラ文全体の意味や統語的特徴については，「～は～です」という和訳の型しか与えられていない。さらに生徒の誤りへの個別対応として，コピュラ*be*の欠落について「文には必ず動詞が必要なので*be*動詞を入れる」と説明するだけで，何故他の動詞でなく*be*なのかについての必然的な理由を示さなかったり，一般動詞との不正共起についても，「文に動詞は一つだけ」という統語事実に反する説明を施しているといったように，コピュラについての現場での取り扱いには，場当たり式で甚だ心許無い状況があるようである。つまり学習者は，構文の意味と形式的特徴について十分な説明を受けずに，英語のコピュラ文についての正確な理解をいきなり迫られるということになる。果たしてこれは妥当な導入であろうか。

この疑問に答えるために，コピュラ文について学習上重要と思われる語学的知識を整理し，さらにもう少し精密な教科書分析を通してそれらが整合性をもって配置・

提示されているかどうかを調べてみることにする。各教師の力量と采配で補完できる部分があるにしても，指針としての教科書に語学的な配慮が十分与えられているかどうか検証することは重要である。それによって，現場の処理に依存していればよい状態かどうかの一端を知ることができる。

2．コピュラ文についての語学的枠組み

2－1　コピュラ動詞について

コピュラは，主語名詞句とその主語についての叙述的な補部を繋ぐ動詞のことを指し，機能的な側面から伝統的に連結詞または繋辞とよばれることもある。（ここでは，誤解の少ない「コピュラ」の呼称で統一する。）一般的にコピュラの特徴については，単独では形態変化をしない形容詞句や名詞句を補部として結合し，時制や一致を受けられる述部動詞句として形式的に成立させるというのが統語的な輪郭である。意味的には，補部が主語の属性や状態等を表わすという意味関係を形成する。コピュラは，ゆるやかな意味で普遍的（weak universal）であり，英語などはこのコピュラを義務的に必要とする体系になっているが，例えばヘブライ語はコピュラという文法範疇を必要とせずに叙述文を表現することができる。日本語の場合は，形容詞及び形容動詞と一般によばれているものが叙述的形容詞句の成分になるが，これらは動詞的な性格が強く，時制による形態変化を受け，活用する。一方，名詞句は「ダ」という日本語のコピュラを義務的に必要としており，日本語は叙述文の表現形式におけるコピュラの必要性については中間的な性質の言語である。この点で英語のシステムとは異なることを外国語習得上は意識する必要があるであろう。

英語の場合，上記の機能が最も純化された典型的コピュラは*be*であるが，機能上の基準を満たす意味で，*appear*, *feel*, *look*, *remain*, *seem*, *smell*, *sound* 等の知覚される現在の状態を表わす動詞や，状態変化のアスペクト的意味の加わった*become*, *get*, *go*, *grow*, *turn* 等の動詞もこの範疇に入り，総合的なコピュラ動詞群を形成するというのが伝統的・一般的な見方である。

その一方で，連結詞としての統語的機能のみに重点を置いた見方もあり，これによるとモダリティを表わすある種の助動詞（例えば*must*）なども，主語と叙述部を繋ぐ役割を担うとされる。コピュラ的な助動詞であるかどうかの判断については，文全体を真偽条件的意味を変えずに受動化できるかどうかによるという。この基準を用いると，モダリティを表わすものではないが，進行形に必要な*be*も助動詞のコピュラとして認定されると考えられるであろう。例えば，‘Mary is writing a novel.’と‘A novel is being written by Mary.’は客観的記述内容は同じである。第3章で後述することになるが，助動詞とコピュラを関係づけるこの捉え方は，外国語学習においては非常に有効なコピュラについての概念化を示唆するものと思われる。

最も典型的なコピュラとして既にbeを挙げたが，ここで注意を喚起しなければならないのは，コピュラの*be*と語彙的な*be*が同定される関係のものではないという点である。*be*は，多様な意味的・統語的機能を展開し，まず本動詞と助動詞に大別される。本動詞の*be*はさらに二つのタイプに分かれ，‘I think ; therefore, I am.’や‘We were all in Japan.’の例に見られるように，「存在（ある場所を占める）」を表わすものと，ここで問題にしているコピュラの*be*の二つがある。コピュラの*be*は，連結詞として多様なコピュラ文の表現パタンを成立させるものであり，おそらく*be*という語彙項目全体の最も核心的な文法機能を担うものと言えるであろう。コピュラ*be*の意味の型としては，主語の内包的属性を述べる叙述型と，主語の外延的定義としての変項の値を定める指定型の二つに大きく分けられるであろう。助動詞の*be*は，補部に動詞的範疇をとるものであり，過去分詞を補語にとって受動文，現在分詞を補語にとって進行形を表わす。　語彙*be*の補部として生じる統語範疇は幅広く，タイプによる制約はあるものの，名詞句，動詞句，形容詞句，前置詞句の主要範疇は全て補部を形成しうる。擬似分裂文にいたっては副詞句や文までも補部になりうる。異なるタイプのコピュラ動詞句は，等位接続構造縮約をかけることができないという制約があるので，同一範疇として取り扱うことはできない。‘*John is a student and reading a book.／ *Mary is a housewife and in the kitchen.／ *Bill is very kind and a teacher.’などが非文の一例である。しかし動詞句としての共通点もあり，疑問文生成において倒置される，音韻的な縮約規則を共有する，否定形についての規則等，動詞範疇としての共通性も無視できない点である。

以上述べてきた統語形式の多様性は，*be*という語彙項目の文法的一般性の高さを意味するが，それだけに*be*の文法概念をまとめようとすると抽象度が高くならざるをえない。外国語学習上は，いずれかの段階で混乱を生じずに，コピュラ動詞についてのこれらの統語的特徴及び多義性をできるだけ単純化して提示することが重要な課題となるであろう。

2－2　表現としてのコピュラ文

コピュラ文の表現内容には大きく分けて叙述型と指定型のふたつがあることは既に述べた。これらは共に本動詞としてのコピュラが関わった文であり，動詞の統語的な分類の点では比較的近い関係にあるにもかかわらず，その補部を等位接続できないという決定的な違いがある。

このことから，この二つの型については，動詞以外の要素が関わって，語学的な性質がかなり異なってくるものとして，慎重に考察する必要がある。日本語の「AハBダ」や英語の‘A be B’等によって表現されるコピュラ文の意味の多様性について，学習上においても重要であると思われる要点を次にまとめてみたい。

まず，主語の性質・属性を叙述するコピュラ文は，一般に措定文（predicational sentence）と呼ばれる。‘My brother is very brave ／a singer／Ken.’といった例をとればわかりやすい。英語の措定文‘A be B’（日本語の「AハBダ」）は，西山（1985, 1990）が日本語のコピュラ文について規定しているように，「「A」で指示される指示対象について，それが「B」で表わされる性質・属性を有している，と叙述する」のがその意味機能である。Aは指示名詞句であり，補部として生じるBには通常形容詞句か叙述名詞句と呼ばれる不定（indefinite）名詞句がくる。‘brave’という形容詞と同様，‘a singer’，‘Ken’といった名詞句もそれぞれ生業，或いは呼び名といった特徴づけとしての属性を表わす。‘Kennedy is President of America.’の例にあるように，補語名詞句は唯一性等の条件が加わるとゼロ冠詞で生ずることもあり，これは補部名詞句の叙述性がより強化されたものと見ることができる。

コピュラ文のもう一つの型は，指定文（specificational sentence）と呼ばれるものである。‘A be B’のAとBの名詞句は，文全体の指定的な読みを成立させるような統語的特性の組み合わせになっている。特に補部に定（definite）名詞句あるいは特定的（specific）名詞句が生じることがあるのが特徴的であり，これは不定・非特定的名詞句を補部とする叙述型コピュラ文とは相補的である。このタイプのコピュラ文には指定文，同一性文，同定文といったパタンがある（西山1985）。

指定文‘A be B’（「AガBダ」または「BハAダ」）は，Bという一項述語を満足する値を探し，それをAによって指定（specify）する意味を持つものと規定される（Declerck, 1988; 西山, 1990）。Bに該当するものは何かを探し，その答をAとして指定するという意味構造である。‘XJAPAN is Prime Minister’s favourite singer.’，"The man over there is the candidate.’のような文がその一例であるが，これらはAとBを倒置して‘Prime Minister's favourite singer is XJAPAN.’，‘The candidate is the man over there.’としても意味はあまり変わらない。‘A be B’及び倒置された‘B be A’はそれぞれ日本語の「AガBダ」及び「BハAダ」に概ね対応している。

変項を含む非指示的な名詞句というのは，いってみればWH疑問詞句で表現できるような意味的性格のものである。「首相の好きな歌手」と言うのは，「首相の好きな歌手が誰であるかということ」に他ならない。その意味で「首相の好きな歌手x」はXJAPANであると特定する。変項xの値は，現在はXJAPANであるけれども，将来はまた別の歌手にかわる可能性もある。このようなことから，この指定文の特徴は基本的に「変項名詞句＋be＋変項を埋める値としての名詞句」ととらえることができ，しかも主語と補部の配置には互換性が見られる。

ここで，措定文と指定文に関して，英語と日本語との表現がどのように対応するのかについての注意すべき点を整理してしておきたい。例えば，日本語では（ア）「奈緒美は（もう立派な）教師だ」は措定文，（イ）「奈緒美が（さっきから探していたこの学校の）教師だ」は指定文，そして（ウ）「（探していたこの学校の）教師は（何と）奈緒美だ」は指定文の倒置型である。日本語はこれらの表現の違いについて，それぞれ（ア）「指示名詞句ハ＋叙述名詞句ダ」（イ）「値指定名詞句ガ＋変項名詞句ダ」，（ウ）「変項名詞句ハ＋値指定名詞句ダ」のように形式的に区別している。英語の場合は，上記（ア）～（ウ）に対応する英文はそれぞれ‘Naomi is a teacher.’，‘Naomi is the teacher.’，‘NAOMI is the teacher.／The teacher is Naomi.’と表現されるであろう。冠詞や音韻的強勢が日本語の助詞の役割に対応する働きをして，コピュラ文の区別に貢献していることがわかる。学校文法，特に初級レヴェルでは措定文と標準的な指定文の例が多いと予想される。このあたりの事情がどの程度きめこまかに考慮されているかによって，その後の英語についての知識の構築が影響を受けるのは必至である。

コピュラ文のパタンとしては他に，同一性文及び同定文といったジャンルのものがある。同一性文は，Aで指示されるものがBで指示されるものと一致することを意味する文である。例えば，英語では‘Dr.Jekyll is Mr. Hyde.’，‘The morning star is the Evening star.’，‘The one who stole the key is the one who stole the money.’のような文，日本語では「5年前に奈緒美と結婚した男が今君が夫と思っている男だ」のような文が該当する。AもBもどちらも指示的な名詞句ではあるが，誰であるのかの値を特定することが目的の表現ではない。AもBもDonnellan（1966）のいうreferential useに相当する意味の名詞句であり，Aの指示する対象がBの指示する対象と同一のものであると認定する文となっている。

最後に同定文について簡単に触れる。日本語でいえば例えば「奈緒美はいつも一番に来て部屋をきれいにしてくれる子だ」のように，主語Aの指示対象が，補部Bで示された範疇のものであるといった解釈をもつものである。「いつも一番に来て部屋をきれいにしてくれる子」という描写をもって，奈緒美という個人を特定するという意味構造になっているので，変項の値を求める名詞句

を含む点では指定文的であるが，主語の描写・説明等を述べる点では措定文との共通性もある。

以上のように，コピュラ文の意味構造は，一筋縄では行かない複雑な内部体系をもつものであり，一見簡単そうな構造の文であっても，正しい解釈として捉えられているかどうかを確認する必要があるであろう。次のセクションでは，英語学習の初心者への入力として，教科書がコピュラ文を適切に取り扱っているかどうか，特に意味機能の導入に支障がないかどうか，実例を拾いながら観察してみたい。

3．中学校の教科書におけるコピュラ文の扱いについて

第1章で既に述べたように，教室で現在教えられているコピュラについての知識は，主に時制や一致等の動詞の形態変化に関するものがほとんどで，コピュラ文全体の意味や連結詞としての*be*の役割については，かなり軽視或いは無視されている状況のようである。具体的に，任意に取り上げた4冊の検定教科書（*New Crown English Course* 1；三省堂，*New Horizon English Course* 1；東京書籍，*Sunshine English Course* 1；開隆堂，*Total English* 1；秀文出版）では，巻末等に重要な文法事項が整理されているが，コピュラ文についての記述は非常に手薄である。いずれも形態的特徴及び否定文・疑問文の形式的特徴については強調されているが，コピュラ文全体の意味・機能については全くといってよいほど取り扱っていない。「～は～です」という和訳パタンが与えられているだけであるので，第2章で述べたいずれのタイプのコピュラ文も「～は～です」という日本語の枠に盲目的に押し込められて，その結果誤訳を生じてしまうことさえある。4冊の中で，コピュラという文法概念を理解させる努力を示していたのは三省堂による教科書だけであった。そこでは，コピュラ文が基本的に主語の状態を表わす文であり，コピュラ*be*がその前後の語を繋ぐ接着剤のような役目を果たすことが絵を通して説明されていた。しかしながら，それはコピュラ動詞の統語的共通点を意識する一助にはなっても，定・不定名詞句等の組み合わせによりコピュラ文全体が表現する意味が理解できるような説明にはなっていない。このような不足はあるものの，コピュラそのものに対して比較的丁寧な扱いをしている*New Crown English Course* 1をここでは取り上げ，どのようなタイプのコピュラ文が，どのような条件の下で提示されているかについて展望したい。

上記教科書には，否定文や疑問文も含めて80例あまりのコピュラ文が使用されている。教科書全体としては，コピュラ文と一般動詞述語文の二つのタイプを導入するという構成になっており，そのうちコピュラ文を多用したテクストが前半に集中している。コピュラ文のタイプとして登場回数の多いのは，措定文と指定文である。単純な構造の名詞句で構成できるタイプの文であることを考えると予測できることではある。二つのうち措定文が幾分多いのであるが，使用頻度はトピックや話の流れの条件によって可変的であり，指定文との頻度差は有意に大きくはない。名詞句に関係詞構造等の複雑な統語構造を要求することの多い同一性文は，当然のことながら一切登場しない。同定文も，範疇の属性記述をもって特定の個体を認定するという，認知的に複雑な概念構造の文であるせいか，実例は見つからない。要するに，会話文の中で単純な構造の措定文及び指定文を適当に織り交ぜながら，それらの用例を繰り返しているといった状況である。現れる文の名詞句の統語構造は，補部に固有名詞，限定詞（＋形容詞）＋普通名詞（＋前置詞句），形容詞，所有格代名詞のいずれかの形が取られ，主語にくるものは全て代名詞であった。

最初に現れる用例は，(1) ‘My is name is Kato Ken.’という文である。これは，話者が誰であるか，何という名前であるかという情報項目に関してKato Kenという値を与えるという意味内容であるから，指定文である。この場合は倒置されているパタンである。(1)の発話は初対面どうし自己紹介する場面のものであるので，理解の困難はない。紹介が終わって家の中を案内しながら，(2) ‘This is my dog.’と言った場合，数ある犬の中で発話者の犬がどれであるかということが特に話題になっていないので，(2)は，そこにいる指差した犬が発話者の飼っているペットであること，即ち所属という属性を述べる措定文である。問題は次の (3) ‘This is my room.’という発言である。Kenのネームプレートが貼ってあるドアを開けながら発話しているので，おそらく案内した部屋がKenの個室であるという属性を述べる措定文として機能していると考えるのが妥当であろう。しかし一方で，例えば一緒にくつろぐ部屋を予め健の部屋に設定してあって，その部屋にたどり着いて「案内したかった自分の部屋はここだよ」と表現しているという解釈の可能性もある。その場合は標準的な指定文である。テキストでは文脈情報が十分ではないので，どちらの解釈をすべきか明確に判断できない。前者の解釈であれば「これは僕の部屋なんだ」，後者の解釈であれば「これが僕の部屋だよ」というように，日本語では明確に区別されるはずであるが，「～は～です」という和訳のステレオタイプの存在により，現場ではこの措定文と指定文の違いが捨象されて同じものとして取り扱われている可能性がある。

措定文と指定文の区別が曖昧に処理されている場面は他にも何箇所か見られる。例えばその一つに，健が中国

からの留学生楊美玲と校庭で初めて出会って自己紹介しあう場面での例がある。健が‘I am Kato Ken’と言ったことに対して，中国人の少女が(4)‘Oh, *you are Ken.* I am Yang Meiling. I'm from China.’（斜体字筆者）と答えている。斜体字部が問題の箇所である。この部分の発話は，相手が名前を名乗ったので，初めて聞く名前を外国人として自分で確認するために繰り返して「健って名前なんだ」と言った発言ともとれるし，或いは美玲が近所に引っ越してきたという状況設定があるので，ホームステイ先の家族に健のことを，ご近所の中学生ということで予め名前だけ聞いてその存在を知っていたので，偶然会って本人が特定できて「あなたが（話しに聞いていた）健君なのね」と発言したともとれる。前者が措定文，後者が指定文の解釈である。

別の場面では，日本人の久美が美玲を夏祭りの練習の見学に連れてきたところで，(5)‘That is my father.’といきなり切り出す発話がある。太鼓を派手に叩いている男性二人の絵が唯一の文脈情報らしきものなのであるが，ここでも措定文解釈か指定文解釈かはっきりしない。即ち，派手なパフォーマンスでやたら目立っている人物に美玲が注目しているので，その人物が実は自分の父親であると説明する措定文のコメントだったかもしれないし，或いは，久美が美玲に前もって父親の練習風景を見に行くことを告げているという状況があって，本人を見つけたので「あれがそうよ」と指定文で確認をとっているということかもしれない。

このように，措定文・指定文の区別がうやむやになる状況がある一方で，解釈が固定されるべき場面もある。ケニアからの留学生ムカミがスポーツとして柔道を練習していることを紹介する場面で，柔道着を見せながら（見せているところの絵も添えられて）(6)‘I have a judo uniform. *This is the uniform.*’と発話している。斜体字部の文では，補部が定名詞句である形式をとっていることから，指定文の解釈しかありえない。柔道着を持っていることは話したけれど，「これがその柔道着よ」と証拠品を呈示しているのである。しかしながら，このような解釈の迷いが生じるはずのない箇所においても，他のところで曖昧な文解釈処理を許されることが続けば，どちらの解釈でも大して変わらないとする誤った認識が固着してしまい，本来起こる必要のない混乱が発生する恐れも心配される。

コピュラ文を駆使した例としてテキスト半ばに「不思議の国のアリス」を編集した章があり，色々な意味でこれはかなり注目に値する。テクストの性質から，章の全文を示すことによって状況説明の代わりとする。

(5) Alice looks up. She sees a rabbit. “*Who are you?*” she asks. “I'm the White Rabbit.” He looks at his watch. “Oh, I'm late! I'm late” He runs into a hole. Alice follows him.

Alice : Someone is on that wall.

Humpty : *I'm Humpty Dumpty. What's your name?*

Alice : *My name is Alice.*

Humpty : Alice? What does it mean?

Alice : Does a name mean anything?

Humpty : Yes, it does. My name means my shape.

Alice watches Humpty. He has two eyes, a nose and a mouth. But he does not have a neck.

Alice : Are you an egg?

Humpty : No, I'm not an egg. *I'm Humpty Dumpty.*

（網掛け，斜体字筆者）

斜体字部は措定文或は指定文としての固定した解釈でよいところである。網掛け部が解釈のゆれる箇所である。‘I'm the White Rabbit.’の文の下線部は，おそらくウサギの固有名詞としてとらえるべきところと思われるが，形式的に定冠詞があるので指定文の読みの可能性も否定できない。アリスは「あなたは誰？」と尋ねていて相手に対する前提的知識がないことがわかるが，ウサギのほうが勝手に「俺がかの有名な白ウサギなのだ，知らないのか」という意味で発話しているかもしれないのである。ここは，定冠詞を伴ったり伴わなかったりする固有名詞の語形成パタンについての難しさも絡んだ状況である。‘Are you an egg?’の文は，通常は措定文読みの中でも内包的な属性を述べるタイプのものである。しかし，その前にHumptyが‘My name means my shape.’と言っているので，卵に似た形のHumptyを観察したアリスが，「名は体を表わす」ということで，「あなたの正体は卵（という物体）なの？」と聞いているのか，「あなたの名前は（体の形の）‘卵’さんなの？」と聞いているのか，曖昧なところである。その質問に対するHumptyの‘No, I'm not an egg. I'm Humpty Dumpty.’という反応も，アリスの曖昧な質問の意味を受けて，「自分は卵という物体ではない。Humpty Dumptyという名前のある立派な存在だ」と属性を主張して抗議しているのか，それとも「‘卵’などという芸のない名前なんかではない，Humpty Dumptyという個性的で立派な名前があるのだ」と固有名詞を訂正・特定しているのか，判然としない。この章はそういったわけで，解釈上かなり厄介な技術を必要とする英文を採用してしまっているのである。非常にスタイリッシュで高級な文学的素材であるが，コピュラ文の理解のおぼつかない中学校一年生にとっては，不適切である恐れのある教材と言わざるを得ないであろう。

4．まとめ

コピュラ文が言語を問わず最も基本的な構文の一つであることは異論のないところであり，外国語学習の要としてかなり初期の段階で導入せざるをえないことも確かである。しかし，コピュラ動詞に関する統語規則のあり方も，或いは文法体系の中での位置付けも日本語と英語で異なり，それに加えてコピュラ文の表現としての多様性も意味的に複雑な様相を呈していることから，英語のコピュラ文の構造と意味を，日本語話者である学習者が正確に理解するのは，想像するほど易しくはない。このことを教授する者はしっかりと認識する必要がある。この小論では，荒削りではあるがそのことを実証的に概観した。特に，コミュニケーションにおける正確な意味解釈作業を妨げないように，問題点を整理した上で，文タイプを教科書の中でどのように配列するか，さらに解釈の混乱を避けるために文脈情報をどのように工夫するか，などの努力が求められることを示した。コピュラ文のように基本的でシンプルなものほど，語学的基盤が確かでよりきめ細かな取り扱いが肝要であると主張したい。

文献

Declerck, R. (1988). *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-clefts* : Foris Publications.

Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Grammar of Spoken and Written English* : Longman.

Donnelan, K. S. (1966). 'Reference and Definite Description', *Philosophical Review* 75.

西山佑司 (1985).「措定文・指定文・同定文の区別をめぐって」.『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』. 17.

西山佑司 (1990).「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」.『文法と意味の間：国広哲弥教授還暦記念論文集』. くろしお出版.

Quirk, R., S, Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

Tode, T. (1999). 'A study on the learning of grammatical rules from a dual-coding perspective : Learning of the English copula Be by Japanese junior high school students'. Unpublished master's thesis, Hyogo-university of Teacher Education.

(2001.7.31 受稿，2001.9.17 受理)